

令和2年度 第1回 泉佐野丘陵地緑地 運営審議会

日時：令和2年7月1日（水）10:00～12:00

場所：泉佐野丘陵緑地 パークセンター

◆出席委員（敬称略）

大阪府立大学 特認教授 増田昇（会長）

元大阪府立大学大学院 教授 前中久行

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授 加我宏之

和歌山大学 システム工学部 教授 宮川智子

大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 准教授 武田重昭

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 代表 久住和茂

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 副代表 小門豊

泉佐野丘陵緑地パーククラブ 事務局長 那須利之

大輪会事務局長 櫻井秀樹

◆欠席委員

和歌山大学 システム工学部 准教授 佐久間康富

泉佐野市都市整備部 部長 中平良太

◆傍聴者 なし

◆概要

前回のふりかえり 10:00～

1. 今年度の整備方針及び活動運営方針等について

①泉佐野丘陵緑地の整備予定等について

②パーククラブ活動内容（4～6月）及び令和2年度活動計画について

③パーククラブの養成講座について

2. その他

①これまでの整備・活動内容の評価について

②コロナ禍を受けた活動方針の見直しについて

① 泉佐野丘陵緑地の整備予定等について

- ・落石工事については、どんな工事をなぜしているのかをホームページや現地の掲示板などで解説してほしい。それを見て子どもたちが学ぶことができるようにしてほしい。
- ・駐車場については、アスファルトなどの面積がなるべく小さくなるように進めてもらいたい。

② パーククラブ活動内容（4～6月）及び令和2年度計画について

- ・今年度からパーククラブの役員を選出する方法が変わった。従来は立候補によって就任しているが、今回はパーククラブの6チームから推薦してもらう形とした。
- ・向井池周遊路が昨年度に一般開放された。これによって大きな整備は終えたと考えている。今後は棚田半島など、より深い場所にお客さんが入って安全に楽しめるような場作りや、既存の広場や園路がより魅力的になるように整備したいと考えている。
- ・公園に来るお客さんが少ないので、リピーターが増えていくような魅力をつくっていききたいと考えている。そのためにクラブ内でもアイデアを募りながら進めていきたい。
- ・今年度はルート検討委員会を立ち上げた。園内の見どころと標識を見直していきたい。
- ・会員数が先月に確定し、前年度と変わらず94名であった。
- ・ルート検討委員会は、中間報告会などを設けるといいだろう。
- ・新型コロナウイルス感染症対策チェックリストが資料として示されているが、大阪府がイベントを開催する時に使う共通のチェックリストである。泉佐野丘陵緑地で行われる竹工作などの体験プログラムの内容に応じて、項目を追加して運用している。検温や3密を避けるための対策などを行った上で、イベントを実施している。
- ・従来は企画書を大阪府に提出した上でイベントを実施していたが、そこに新型コロナ対策は別紙参照と記載した上で、チェックリストを添付している。その内容を大阪府と協議した上で、イベントを実施している。
- ・屋外活動は今後、猛暑も課題になる。熱中症対策とマスクの対応などについてもチェックリストで扱う必要があるだろう。文部科学省では小中学校の体育の授業について、猛暑の際には2メートルの感覚を空ける場合はマスクを外してもよい、というガイドラインを設けている。
- ・パーククラブの活動は7月からサマータイムとなる。サマータイムでは熱中症対策として、2m以上の間隔を空けた状態でマスクを外せることとする。
- ・屋外活動については、例えばレンジャー棚田は敷地が限られており密になる可能性があるもので、参加者を班分けして、畝を区切ることで作業場所を分ける、といった工夫をしている。

- ・ 今後は小学校などの環境学習の受け入れも課題になる。通常時の場合も安全対策に工夫が必要であり、例えば 100 人規模であれば 10 人ずつのグループに分け、各グループに 1 人ずつの安全管理係を配置するなど、学校側と協力して体制を整えている。新型コロナ対策の場合にはどのような形になるのか、検討が必要だろう。
- ・ 6 月に開催したササユリ鑑賞会は、新型コロナの影響で形を変更したが、その方が良かったという例になった。従来の鑑賞会では概ねのルートを設定していたが、そのルートに沿って、案内役も含めて全員で移動する形をとっていた。今回はそうではなく、定点に説明役を配置し、数名ずつを定点に連れて行く、という形とした。この形だとお客さんの質問にも答えやすく、説明を担当する者も勉強することになるので、今後もこの形でいきたいと話している。
- ・ 定点で解説する内容については、ササユリ鑑賞会に限らず、ルート検討委員会でも話し合うとよいだろう。
- ・ 竹工作チームが初めて、竹細工の連続講座を開いている。連続講座はこれまで、アゲハチョウを育てるプログラムのみだった。今後はこのような連続講座にも取り組んでいきたい。
- ・ 若い人たちが活動に参加しやすい環境をつくることも大切である。会社を退職した人たちは平日を中心に活動したいかもしれないが、まだ働いている若い世代は土日を中心にしたなど、世代によって活動の捉え方が違うはずである。
- ・ 現状では、若い世代は全体の 1 割である。そもそも人数が少ないことも課題である。

③ パークレンジャー養成講座について

- ・ 9 月からスタートするということは、早々に内容を確定して告知する必要がある。
- ・ 例年は 9 月の広報誌に掲載してもらっており、7 月中旬に入稿すれば間に合う。
- ・ コロナ対策は必要だが、講座を修了しても全員がパーククラブに入会するとは限らないので、より多くの人を受講できる形を検討してもらいたい。
- ・ 事務局から各委員に連絡をとってもらい、調整を進めてもらいたい。各委員に担当していただくか、他の誰かを紹介していただくか。樹木調査と樹木管理については、前中委員と連絡をとること。地域の景観と歴史文化については、加我委員と連絡をとること。企画のつくり方とおもてなしについては、武田委員と連絡をとること。
- ・ 講座のタイトルについて。樹木調査と範囲が狭くなってしまうので、植生管理など、もう少し広い意味を含むことができるタイトルを検討したい。

① これまでの整備・活動内容の評価について

- ・ 10周年誌「はじめに」に書く冊子の目的として、パークレンジャー養成講座で使うことはもちろん、大阪府に限らず、公園運営を担当する職員に対する研修素材として活用することも追記してほしい。関係者で理念や経緯を共有することも大切だが、この公園は新しい公共のスタートでもある。そのような内容も「はじめに」に持ち込まれるとよい。
- ・ 「歴史編」というと、長大な時間をイメージするので、「取り組みの履歴」くらいの表現がよいかもしれない。それに対して基本編は「取り組みの理念と体制」となるのではないか。
- ・ P4の、土地利用検討委員会からパーククラブの設立までを示した概略図について、理念の背景と内容など、開園前に議論されていたことが記されているページなので、この概略図も開園までを示すとよいだろう。
- ・ P10-11の植生図について。航空写真から1971年と2010年の植生を解説している。意外だったのは1971年と2010年の間で、竹林の面積が航空写真上ではあまり拡大していなかったことである。少し違和感があるので、見直したいと思っている。
- ・ 1971年の公園は全面的に耕作されているが、2010年には、例えば向井池南側にある棚田半島は水田ではなくなっているはずである。航空写真で見るとまだ田んぼに見えるかもしれないが、景観としてはもう雑草群落になっているのかもしれない。
- ・ P6-7で使われていることマップは北が左側だが、他の図面は北が右側になっている。ことマップのよう方位に合わせたほうが見やすいかもしれない。
- ・ P9の標高などの情報は大阪府立大学から提供したものだが、中地区全体ではなくコラボレーション区域しか解析していない。少し見直したい。
- ・ 新しい公共の在り方についてアドバイスをいただいていた運営会議の設立当初の委員にも、コラムのようなものをいただくとありがたい。
- ・ 10周年誌のタイトルについては、引き続き検討することとする。冊子の完成時期については、新型コロナの影響で協議が遅れたことを加味し、年内を目標とする。

② コロナ禍を受けた活動方針の見直しについて

- ・ 大阪府営公園には有料駐車場を運営している公園もあるが、その仕組みを教えてほしい。
→大阪府営公園の有料駐車場は、府の条例に基づいて料金を設定している。
- ・ 資金獲得につながることで情報発信がある。泉佐野丘陵緑地のファンクラブのようなものは作れないか。SNSやメールリングリストを使って積極的に情報を提供する。メールアドレスの管理など、個人情報の取り扱いについては慎重に検討する必要がある。ホームページを構えているだけではお客さんは来ない。

- ・他の府営公園では、SNSなどで利用者がたくさん発信している例も見られる。公園管理者ばかりが発信するのではなく、利用者に発信してもらえる仕組みについても検討できるとよいだろう。
- ・新型コロナの影響を受け、積極的に動画配信に取り組む公園や植物園、動物園が見られた。動画を配信しすぎると、お客さんが動画で満足して現地に来なくなるのではないかという議論もあるが、活動を誘発するためには動画が効果的である。
- ・これからは小学生が1人につき1台のパソコンやタブレットをもつ時代となる。そんな状況も踏まえた情報発信を検討しなければならない。
- ・堺自然ふれあいの森で取り組まれているメールマガジンは、自分たちで運用している。来園された方にアンケートでメールマガジンの配信希望を確認している。
- ・個人情報をごどのような形で管理するのが重要である。個人名などの情報は取得せずに、個人情報とメールアドレスが紐付かない形で管理することができればいいのかもしれない。
- ・ウィズコロナの観点であるが、新型コロナに対する泉佐野丘陵緑地の対応がとても丁寧である。これは公園の価値の向上につながる。例えば棚田の収穫体験で、畝の区画を工夫している様子を映像で発信すると、丁寧に対応していて安心できる公園として、ファンが増えるかもしれない。
- ・丁寧な対応はPRになるだろう。堺自然ふれあいの森でも、クラブの行動指針を明文化して発信するように助言している。チェックリストなどによる対応はもちろん重要だが、それに加えて、新型コロナに対する姿勢を発信できるとよいだろう。
- ・公園の様子を個人が発信する、アンバサダーのような人が現れる方法を考えるとよいかもしれない。特定の個人による発信を通じてメールマガジンに登録してもらえるような仕組みである。
- ・公園の花の情報を発信している人はAさん、公園の昆虫の情報を発信しているのはBさん、というように公園がアンバサダーとしてお願いしている人の発信を通じて、公園の情報にたどり着くような導線を考えてよいだろう。
- ・例えば、えんづくりプログラムに取り組まれている団体のSNSやホームページによる発信に、公園のリンクも載せてもらうこともできるだろう。
- ・利用者のニーズに応じたウォーキングコースなどを考えたらどうか。例えば、植物の好みに合わせたウォーキングの時期やコースを設定する、短時間しか滞在できない人には20分ほどのコースを提案する、など。
- ・例えば最寄り駅からバスに乗るのを嫌がる人もいる。そんな人のために駅からレンタサイクルで公園に行く方法を提示する、といったことも考えられるだろう。
- ・パーククラブのルート検討委員会では、20分コースや30分コースなどを設定することはできないか。

- ・大阪府下の公園職員に研修をすることも考えてほしい。他の公園もパートナーシップ型の公園運営に興味を持っているはずである。そのような研修を行えば、この公園が直営で運営されていることの意義が認識されるだろう。
- ・ここが公園だと気づかずに通り過ぎてしまう人もいる。公園の前まで来たのに、わかりやすい看板などがいないために通り過ぎてしまう。パーククラブの中では、モニュメントのようなものを作ってはどうかという意見もあった。わかりやすい発信が必要である。
- ・公園に対するイメージは人によって異なる。この公園の外観が、その人のもつ公園のイメージと違うのだろう。
- ・泉佐野丘陵緑地という公園を知ってもらうということと、一般的な公園のように知ってもらう、ということは別の話である。入り口にサインが不足しているという問題はあるかもしれないが、地域の景観に溶け込んだ里山のような公園をどのように認知してもらえるか、ということを考えてもらいたい。
- ・しかし公園に入ってもらえなければわからないこともあるので、看板以外の方法でも構わないので、入り口にきたら入ってきてももらえる仕掛けは必要である。
- ・この公園は集客などでナンバーワンを目指すのではなく、オンリーワンを目指してきた。他の公園とは違った個性を持っている。先日、この公園を利用しているという知人から話を聞いたが、他の府営公園とは違った感覚で園内を歩いていると言っていた。
- ・新型コロナの影響で、デジタル空間でのコミュニケーションが増えた。人々がデジタル空間にアクセスすることについて、ハードルが下がっている。パークレンジャー養成講座やスキルアップ講座も、後でウェブ上でも見るができるようにするなど、ウェブ上での展開も検討するとよいだろう。
- ・これまでの公園は休日利用が中心だった。しかし新型コロナの影響下では、土日に来園が集中すると密になってしまう。そこで土日に集中させるのではなく平日も含めて分散させることはできないか。その場合、平日はどのように利用してもらえるといいのか。
- ・例えばテレワークが浸透しつつあるので、パークセンターにwifiを完備し、研修室を間仕切りしてコワーキングスペースのように使ってもらえることも考えられるだろう。森の中で仕事ができるということがPRになる。
- ・新型コロナによる影響下での利用について、お客さんがどのような理由で公園に来られているのかについても、意見も聞いておいてほしい。それが魅力づくりの参考になる。
- ・今回のような協議は、あと1~2回は行いたい。それを踏まえて、新しい取り組みを展開する上では何がネックであり、どうクリアすればいいのかについて検討したい。

今後の審議会について

- ・新型コロナの影響を踏まえた今後の展開等については、部会の中で議論いただきたい。
- ・昨年度の中地区検討部会では、委員長と前中委員と武田委員が中心となって出席していた。今後は部会のテーマに応じて、他の委員にも出席していただきたい。

以上